

地方都市におけるフットパス導入による地域活性化の検討と課題

内 田 晃

1. はじめに

(1) 研究の背景

近年、ライフスタイルや余暇活動の多様化、健康ブームの盛り上がりなどに伴い、人々の「歩くこと」への関心が高まっており、各地で市町村、商工団体、鉄道会社など様々な主体が主催するウォーキングイベントが開催されている。専門ガイドによる案内を聞きながら歩いて観光地やご当地グルメを楽しむ、いわゆる「まち歩き」のプログラムを提供している団体が多くの都市に生まれ、テレビでまち歩き番組が放映されるなど、多様なニーズに対応した多様な取り組みが見られる。バスで移動しながら観光スポットだけを巡り、その都市の表面を見るに過ぎなかった既存の観光スタイルと違い、歩くスピードでゆっくりと見て回るとは、その都市が醸し出す表情、そこで暮らす市民の生活情景を五感で感じることができる。滞在時間が長くなり地域の経済活性化にも寄与するという意味で、観光産業としての優位性も高い。

イギリスには「フットパス」という概念が多くの市民の間に定着している。フットパスとは森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩く【Foot】ことができる小径（こみち）【Path】の意味¹⁾で、元々は大地主が囲い込んでいた私有地の中を国民が歩くことができるように主張した通行権の獲得運動が発祥である。イギリス国内には総延長4,000km以上のフットパスが整備されている。年間約3,500万人の利用者が消費する総額は約1兆2000億円²⁾にもものぼり、多くの経済効果を創出する産業として認識されている。日本でも北海道、山形県、茨城県、熊本県などの市町村でフットパス施策が推進されており、その多くが交流人口獲得に効果をあげるとともに、他地域との間でフットパスを通じた交流も進んでいる。フットパスは自然を感じることでできる小径そのものを資源として活用するものであり、特別な観光地がない“普通の”地域においても、施策を展開できるという意味で、持続可能で普遍的な地域活性化の一手法として注目される。

(2) 研究の目的

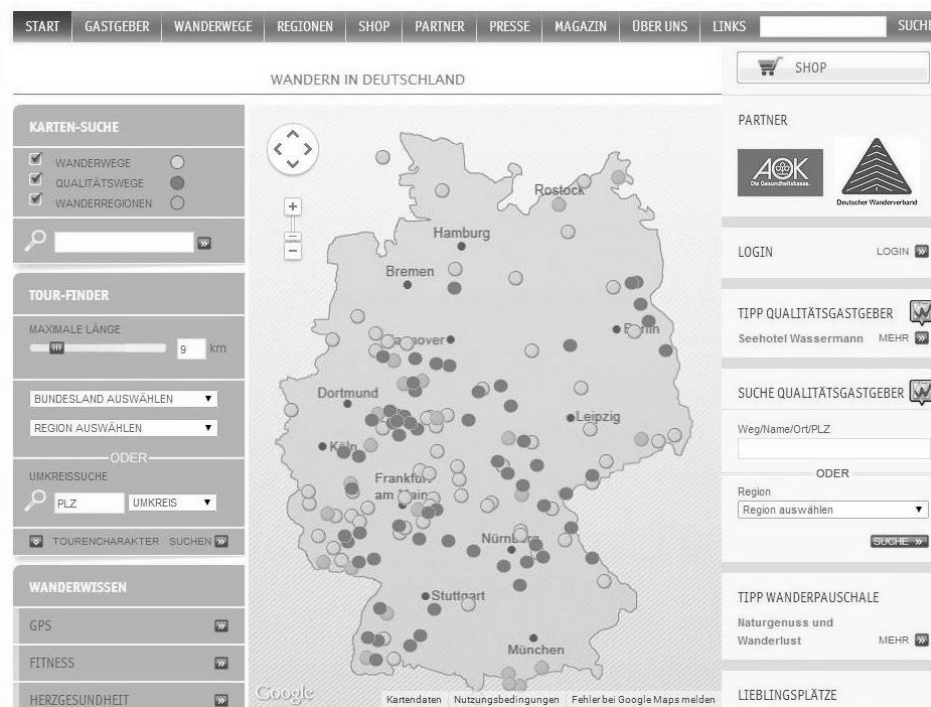
本研究では大きな観光資源のない地方都市において、フットパス施策が有効な地域活性化の取り組みの一つになり得るという前提に基づき、フットパス施策を展開する上での課題や方策を検討することを目的とする。まず、イギリスにおけるフットパスと同様に多くのウォーキング訪問者が地域活性化に寄与しているドイツの先進事例について、情報発信手法や現地での案内手法について調査を行う。次いで、福岡県内の2都市において、地域資源を活かしたフットパスのルートを検討し、提案を行う。その上で、各都市が置かれた状況を踏まえながら、地域活性化に結びつけるための課題を検討することを目的とする。

2. ドイツにおけるフットパスの取り組み状況

(1) 様々な媒体による情報提供

ドイツでは「閉店法 (Ladenschlussgesetz)」⁽¹⁾によって、日曜祝日の小売店舗の営業が基本的に認められていないため、日曜日には家族と一緒に余暇を楽しむ傾向が強い。特にウォーキング、ハイキング、サイクリングなど自然に親しみながら長時間楽しむレクリエーションの人气が高く、日照時間の長い4月から9月頃にかけて、各地の自然公園や景勝地では多くのツーリストで賑わう。ドイツ在住のエコガイドによる環境レポート³⁾によると、ドイツ人の2人に1人がハイキングやウォーキングを趣味にし、1人あたり年間平均5.2回実施し、その目的は87.3%が「自然を体験すること」、72.2%が「体を動かすこと」、64.4%が「健康のため」と答えている。ドイツ人にとって、自然の空気を吸いながら「歩く」という行為は生活習慣の一つであり、そのために必要な様々な情報ツールが提供されている。

ドイツ国内各地域にある50以上のクラブを束ねる組織としてドイツハイキング連盟 (Deutscher Wanderverband) があり、各地域のコースやテーマ (巡礼、健康、教育など) ウォークに関する情報の発信、イベント開催、情報誌の発行など、ウォーキングやハイキングに関する様々な事業を展開している。また、同連盟が運営している情報提供のウェブサイト (<http://www.wanderbares-deutschland.de/>) では、各地域のウォーキングコースが検索できるサービスが提供されており、Wanderwege (Trails=トレイル)、Qualitätswege (Quality paths=素晴らしい歩道) といった種類別、最大距離、州、地域などの情報を元に様々な目的に応じた検索が可能である。

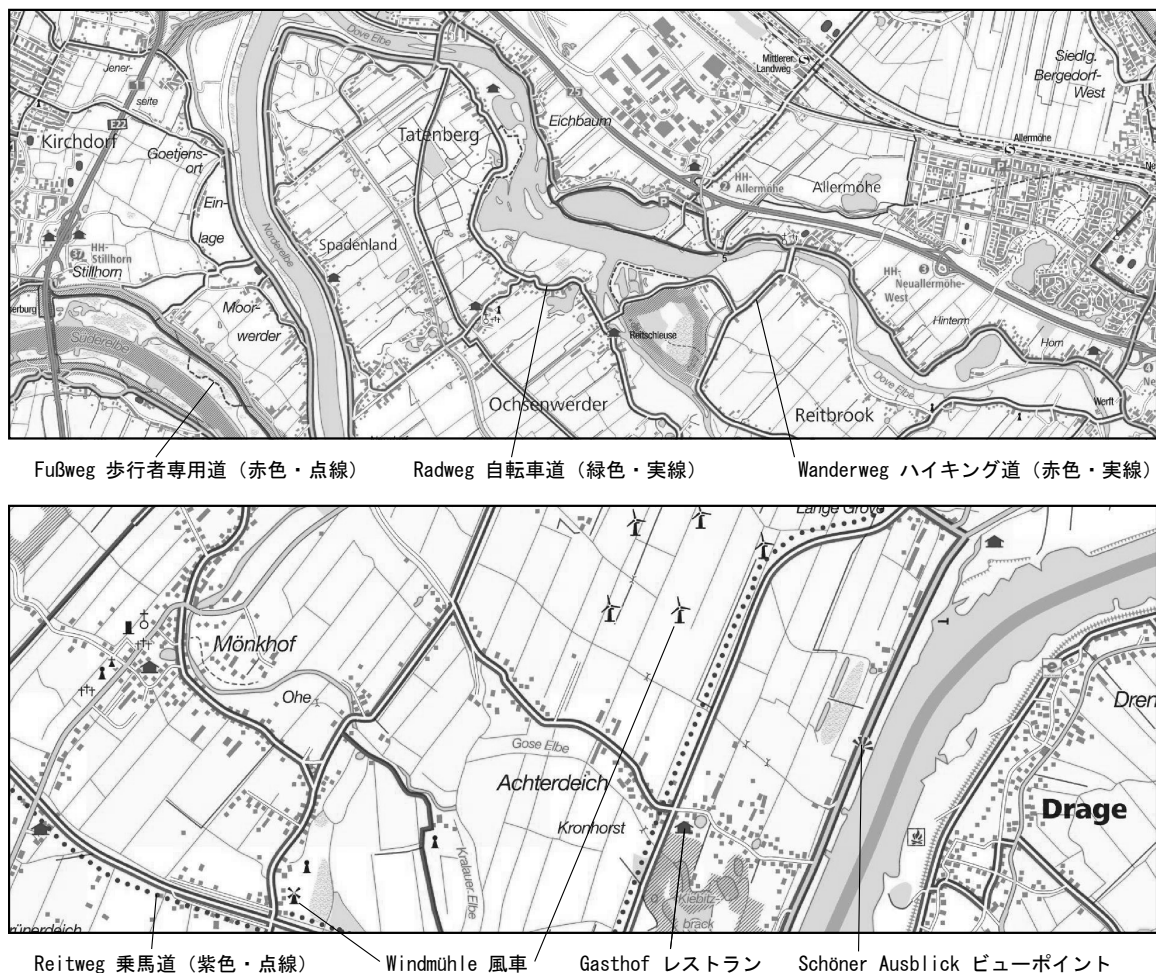


出典：ドイツハイキング連盟ウェブサイト (<http://www.wanderbares-deutschland.de/>)

図1 ドイツハイキング連盟による国内のコース検索画面

英国で表現されているフットパスに相当するドイツ語は“Fußweg”である。“Fuß”は英語の“Foot”、“weg”は“path”を意味する単語である。ただし、英国の“Footpath”、日本の“フットパス”のように単語自体がウォーキングコースを意味する概念としては用いられておらず、あくまでも「自動車が通行できない歩行者専用の小径」という意味合いが強い。英国の“Footpath”に相当する概念としては“Wanderweg (=trailトレイル)”が一般的である。

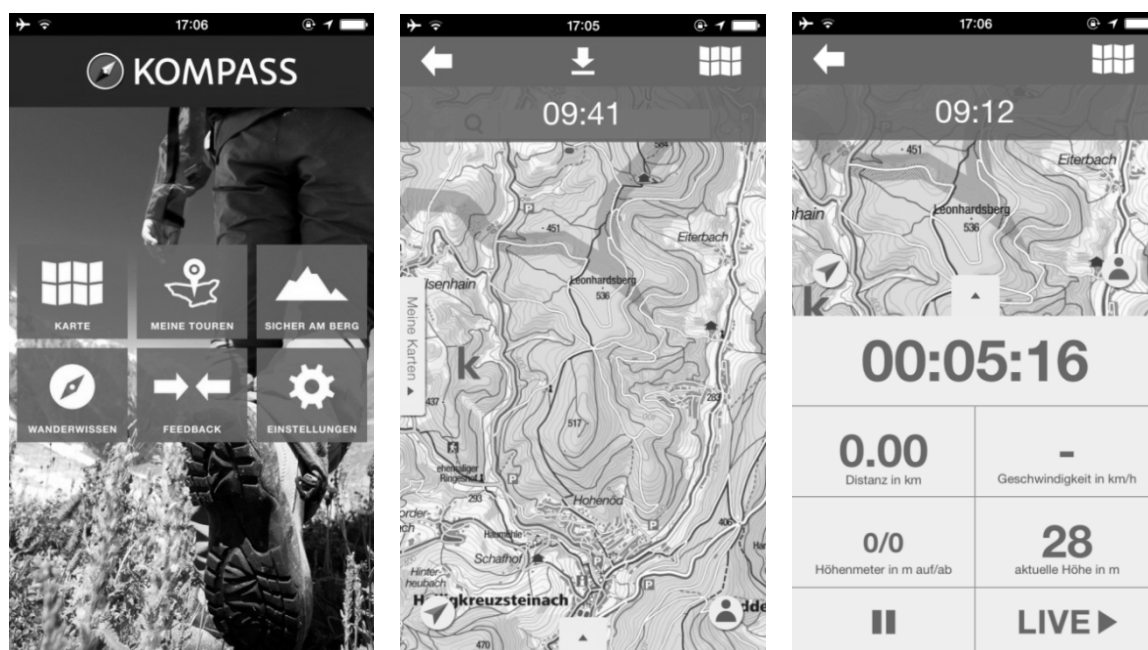
この“Wanderweg”が細かく掲載されているのがオーストリアに本社のあるKOMPASS社が製作・販売している5万分の1地図（Wander und Rad Karten）で、地形図上に歩行者向けのルートが赤系の色で、自転車向けのルートが緑系の色で示されている。またテーマ性の高いルートは他の色で区別され、特別なマークが示されている。図2に示すように、立ち寄り可能なレストラン、ホテル、ビューポイント、風車などのランドマークが表記されており、携帯用地図として多くの利用者に活用されている。この地図はドイツ国内ほぼ全域が網羅されており、一部10ユーロ前後で全国の書店で販売されている。多くの書店では全国各地の地図が番号順に陳列されており、ハイキング人気の高さをうかがい知れる。



出典：KOMPASSウェブサイト (<http://www.kompass.de/>) を基に筆者作成

図2 歩行者道・自転車道が掲載されているKOMPASS社製50000分の1地図

近年、スマートフォン利用者の急速な拡大に対応して、KOMPASS社では専用アプリケーション「Wanderkarte」を提供しており、市販の地図がオンラインで閲覧可能なほか、ルートプランの作成や歩行履歴なども作成できる。また、電波の発する位置情報を活用し、緊急時にSOS発信できる機能も付いている。携帯電話の電波が届くエリアでは、効率的にウォーキングを行うための有効な情報ツールと言える。ただし無料版は情報閲覧が一部制限されており、GPS端末として活用するには有料版をダウンロードして利用する必要がある。



出典：KOMPASS社スマートフォンウェブサイト (<http://www.kompass.de/>) を基に筆者作成

図3 KOMPASS社が提供するスマートフォン用アプリケーションの画面

また、ドイツ国内の多くの自治体では、州、市、郡単位でハイキングやサイクリング向けの地図入りパンフレットを発行しているところが多い。これらは各地のインフォメーションや駅にて無料で手に入れることができるため、多くの観光客が活用している。

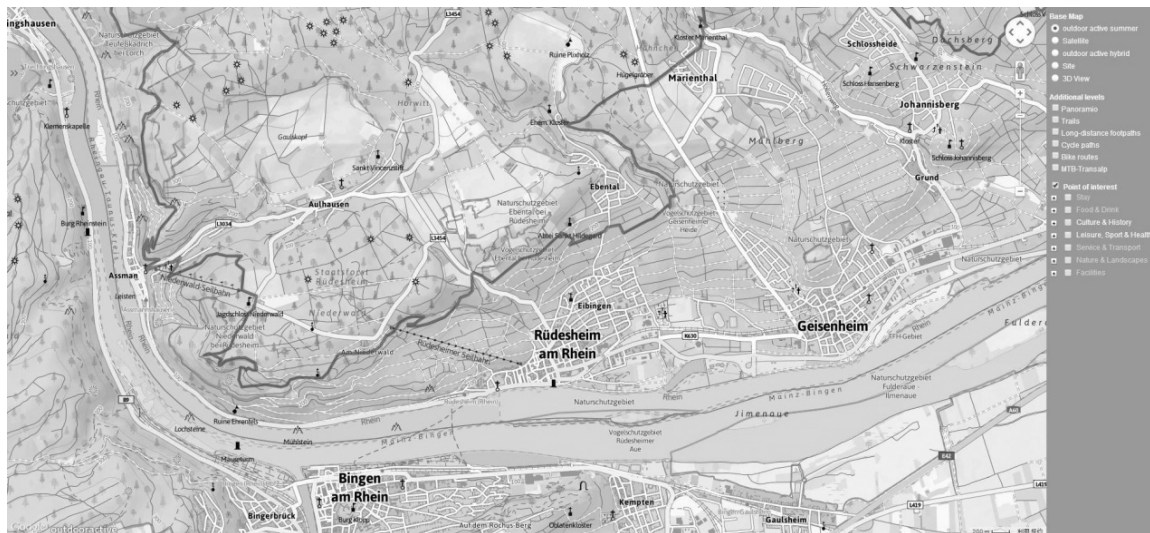


写真1 各地で発行されているパンフ類



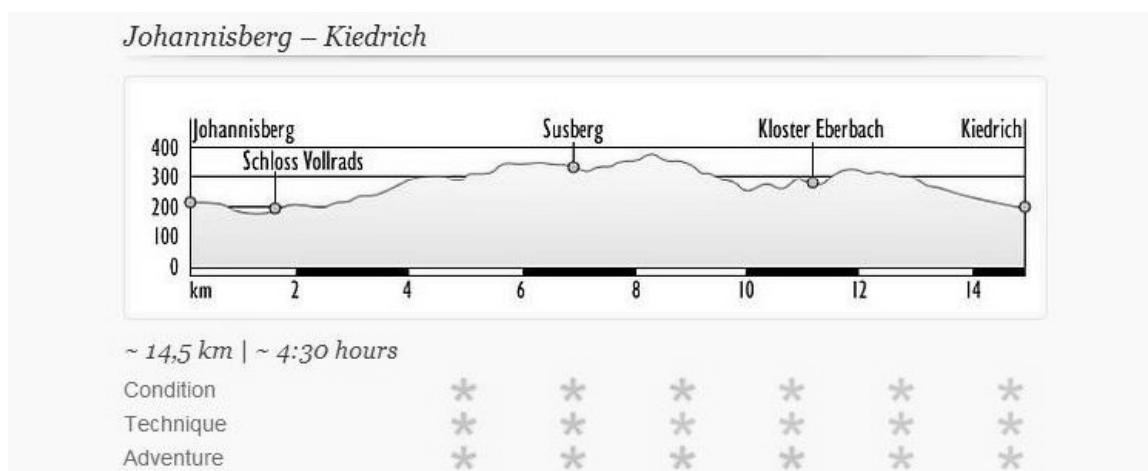
写真2 パンフに掲載されているルート

一方、州を超えたハイキングルートも多く、国内で最も人気のあるルートの一つとして「ライン川山道（Rheinsteig）」がある。これはライン川沿いの3州（Nordrhein-Westfalen州、Rheinland-Pfalz州、Hessen州）の共同プロジェクトとして2005年に整備されたもので、ユネスコ世界遺産に指定されているライン川中流域の景勝地を眺めながらその沿線の山道を歩く全長約320kmのコースである。起終点は旧西ドイツの首都ボン（Bonn）と温泉保養地ヴィースバーデン（Wiesbaden）で、全コースが23ステージに分割されており、途中にはライン川とモーゼル川が合流する景勝地コブレンツ（Koblenz）、ワイン産地として有名なリュースハイム（Rüdesheim）等の観光地が点在している。各ステージの起終点は公共交通アクセスを考慮して設定されており、全ルート踏破を目的に繰り返し足を運ぶ利用も多い。図4、5に示すように公式ウェブサイトにはルートの詳細図や、ステージ毎の断面図、山道のコンディション、必要な技術、冒険度がそれぞれランク付けされた評価などが掲載されている。



出典：Rheinsteigウェブサイト (<http://www.rheinsteig.de/>)

図4 ライン川山道のルートの一部



出典：Rheinsteigウェブサイト (<http://www.rheinsteig.de/>)

図5 ライン川山道のステージ毎に提供されている断面図

(2) 現地での情報提供

以上のようにウォーキングの事前準備段階では、市販地図やインターネット等の様々な媒体によって情報収集が可能であり、現地に着いてからも観光インフォメーションや市役所等ではウォーキングマップ等を入手できることが多い。実際のウォーキングルートに着いてからは基本的には自己責任において行動することが求められるが、地図上に示されたウォーキングルートの場合は案内標識等が設置されていることが一般的である。写真3、4に示すように、サイクリングコースやウォーキングコースの番号、目的地までの距離が示された専用標識が設置されていたり、他の用途で使われている標識の一部にシールでコース番号が貼られているようなケースも見られる。



写真3 歩行者、自転車向けの様々な標識



写真4 シールで貼られたコース番号

ただし上記のような標識は市街地内に限られており、自然環境の中ではほとんど見られない。森林内では樹木に番号や矢印をペンキで示す、あるいは小さなボードを釘で打ち付けているケースが多い。ただし自然環境や景観へ配慮して、マーキングは利用者が認識できる最小限の大きさにとどめられている。また、人気のあるコースやテーマ性の高いコースには市販の地図上で固有のマークが示されているが、利用者が識別しやすいように同じマークがルートの樹木にも示されている（写真6）。



写真5 樹木に示されたコースのマーク



写真6 地図と一致しているマーク

利用者にとってウォーキング途中で最も必要な情報としてトイレの位置があげられる。公共機関による無料公衆トイレが公園等に多く設置されている日本と違い、ドイツでは都市部でさえもトイレが設置されているケースは稀で、駅や大型商業施設でも有料かチップ制である。自然地域にはトイレはほとんどなく、多くの利用者はカフェやレストランで済ませるのが一般的である。市販の地図にもトイレに関する情報はほとんど掲載されていない。そのため、レストランやホテルの情報が貴重であり、地図による情報に加えて、写真7に見られるような看板を施設側が独自で設置しているケースが多い。また、地域に生息する希少な動植物を紹介する掲示板が整備されているケースも多く見られる（写真8）。



写真7 レストランの案内



写真8 希少動物を紹介する案内板

イギリスにおけるフットパスの起源は、市民が自然を楽しみながら楽しく歩く権利を主張し、私有地を歩行者のために解放することを求めた運動に端を発することは前述したが、現代の利用者にとっても、これから通行する道路が公的道路なのか、私有地でも歩くことが可能なのか、もしくは立入できない私道なのかを識別することは重要である。そのため、市販の地図や公的機関によるパンフレットに掲載されているルートは基本的には立入可能な道路として認識されており、このような出版物は人々の行動にお墨付きを与えるという意味で重要性が高い。写真9は民有地である「PRIVAT」が道路上に表記されている事例で、写真10は私道のため通り抜け禁止であることを意味する「Privatweg Durchgang verboten!」と表記された看板が設置されている事例である。



写真9 私有地を示した表示



写真10 立入禁止を示した案内板

3. 地方都市におけるフットパス展開の検討

(1) 福岡県中間市における検討

中間市は福岡県の北部、北九州市の西隣に隣接する人口約4万3千人の都市である。戦後は石炭産業を中心として、又、拡大する北九州都市圏のベッドタウンとして大きく成長したが、近年は産業構造の転換による人口減少に直面している。市内には石炭の舟運を支えた堀川運河、遠賀川鉄橋、八幡製鐵所遠賀川水源地ポンプ室、炭鉱関連施設など、日本の近代化を支えた産業遺産が多数分布している。また、唐津街道底井野往還沿いなど由緒ある寺院、神社など多数の歴史的資源も残っている。

北九州市立大学では中間市と共同で、平成23年度から「中間市文化財の現状調査及び活用・観光方策に関する調査研究」⁴⁾⁵⁾に取り組んできた。この中で、地域の貴重な資源は今後の中間市における観光振興やレクリエーション振興などで重要な役割を果たす素材であるという認識に立ち、これらを活かした観光振興方策の検討を行った。中間市第4次総合計画（平成18年度～平成27年度）では、観光施策や文化財保護施策は他の主要施策と同様に市の主要施策のひとつとして扱われてきたが、特に観光については、市内に魅力的な観光資源が乏しいとの認識から、新たな観光資源の開発やイベントの活性化が課題であることが指摘されていた。一方で後期基本計画からは遠賀川水源地ポンプ室がユネスコ世界文化遺産候補となったことから、他の産業遺産とあわせた観光政策を行っていくことが明記された。「いつてみたいまち なかま」という表現はこれまでにはあまりなかった「観光の町」を意識したものであり、中間市を訪れる人をいかに増やし、その人たちにどうおもてなしをしていくかが今後の観光施策の中では大きな課題となってくると考えられた。そこで、これまで複数の異なる媒体で紹介されていた観光ルートを統合するような形で、新しい観光・散策コースとして、「自然を楽しみながら川を巡るコース」、「往来の面影を垣間見ながら昔のみちを辿るコース」、「産業遺産を学びながら巡るコース」、「廃線跡を探しながら探検するコース」の4コースを提案した。これらは中間市に存在する様々な歴史的・文化的地域資源をたどりながら散策し、これらを見学しながら辿っていくルートであった。さらにその提案を踏まえて検討を行ったのがフットパスの考え方を取り入れ、自然の景観や、自然のまま残された道を楽しみながら散策できる新たなルートの提案であった。

中間市では「田園風景や近代化遺産など地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くことができる道」をフットパスであると考えることができる。昔からあるありのままの風景とは、自然に形成されたものではなく、地域の方々の長年にわたる自然への働きかけや、風土に根ざした伝統的な生活スタイル、土地への愛着などの結果として生み出され、維持・管理されてきたものである。このような地域のあらゆる活動によって育まれた風景を楽しみ、さらには地域の歴史的・文化的資源を学びながら歩くフットパスは、将来的に「世界遺産のあるまち・中間市」の観光の核となりうるものである。このような考え方にに基づき、以下に示す3つのルートを提案した。

1) フットパス・ルート1「街なかの遺産を巡るコース」

中間市の中心部にある堀川、中間唐戸、遠賀川水源地ポンプ室などの近代化産業遺産群を巡るとともに、廃止されたJR香月線や炭鉱引き込み線などの線路跡を巡るルート。ワクド岩の近くには舗装されていない道路が現在でも残っており、近くの朝霧神社の小山や朝霧池など自然の風景を楽しむこともできる、まさにフットパスにはうってつけのコースである。また市内唯一の温泉施設である中間温泉が通谷駅の手前に立地しており、ウォーキングの後に疲れを癒やして終了することも可能である。



写真11 黒川の土手



写真12 ワクド岩近くの未舗装道路

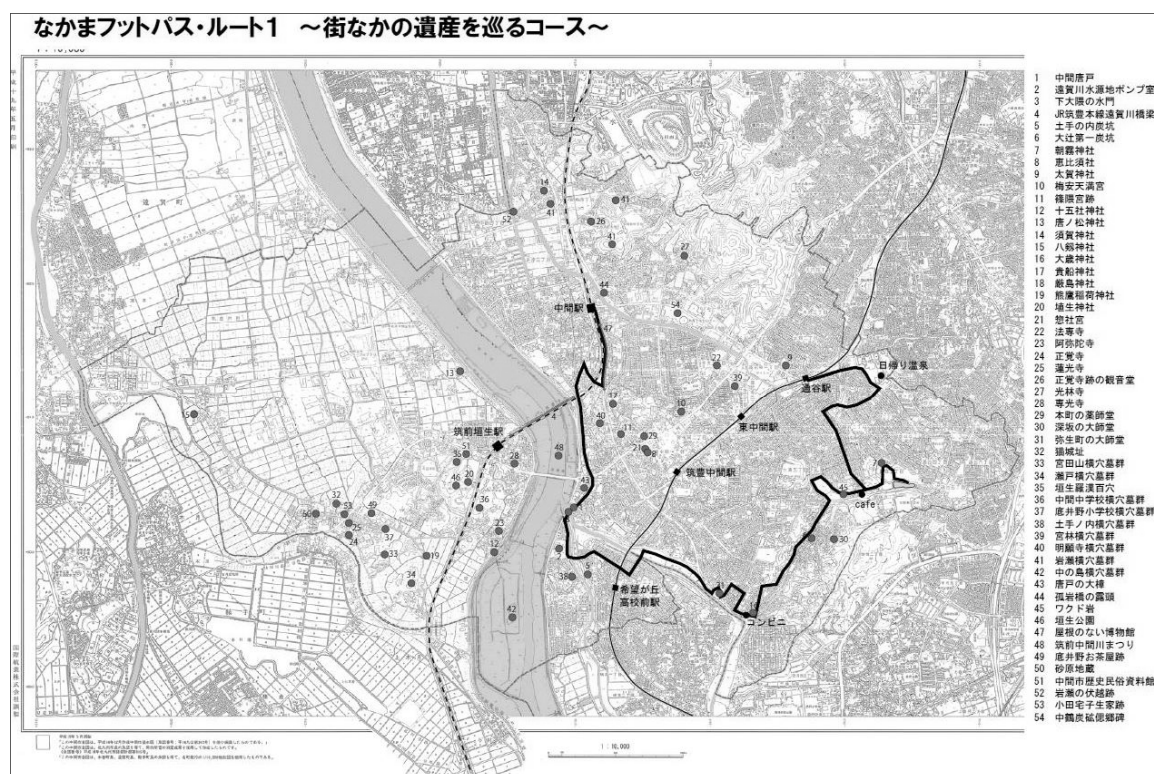


図6 なかまフットパス・ルート1～街なかの遺産を巡るコース～

2) フットパス・ルート2「底井野の田園風景を楽しむコース」

遠賀川の左岸側はのどかな田園風景が広がっており、底井野地区には猫城趾や代官所跡など様々な史蹟・寺院が残っている。ＪＲ筑前垣生駅から田園地帯の中を横断しながら、中底井野の八剱神社へと至る。さらに東進すると、福岡藩が参勤交代の際に自藩内の近道として利用していた福岡藩主専用の参勤交代道である底井野往還へと至る。上底井野地区には砂原地蔵、猫城趾、小田宅子旧家跡、黒田藩主御茶屋跡など、様々な史蹟が残っている。底井野往還から垣生公園の中を横断し、埴生神社を経てＪＲ筑前垣生駅へと戻る。途中には舗装されていない農道やあぜ道があり、360度一望できる田園風景と歴史資源をあわせて楽しむルートである。



写真13 田園地帯の中のあぜ道



写真14 底井野往還

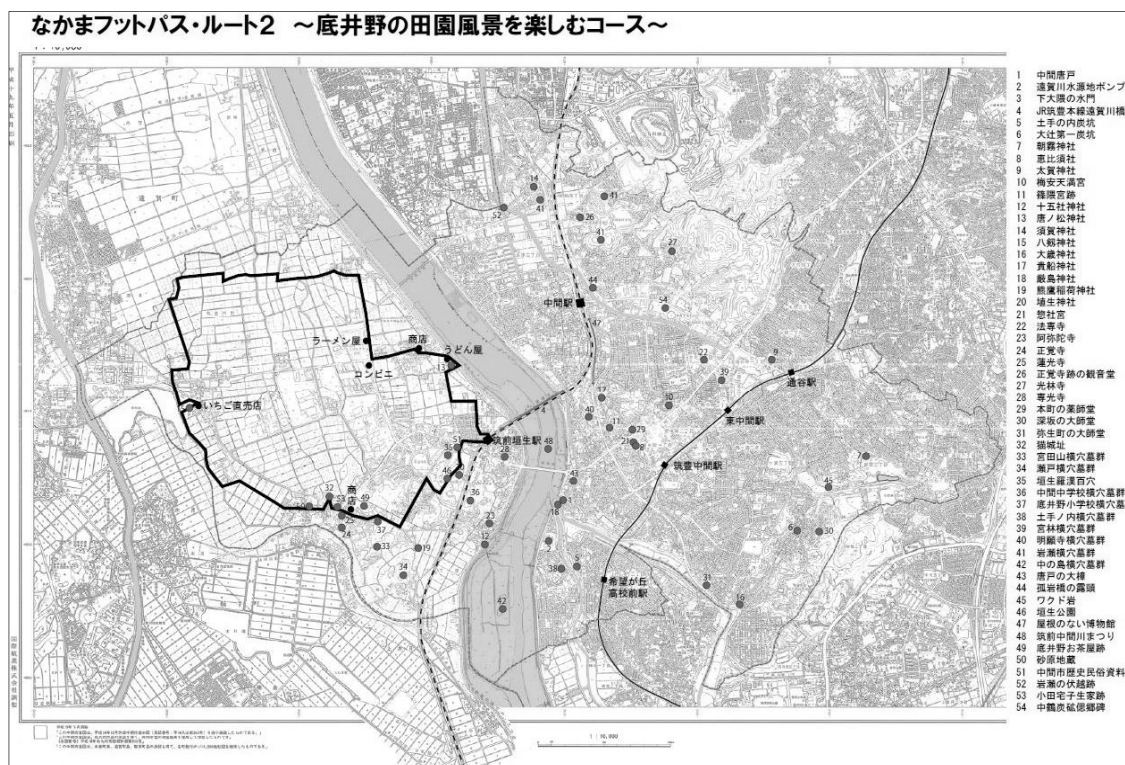


図7 なかまフットパス・ルート2～底井野の田園風景を楽しむコース～

3) フットパス・ルート3「川の歴史を偲び、川を眺める視点場を巡るルート」

中間市には地域のシンボルである遠賀川をはじめ、曲川や笹尾川などの自然河川や、石炭を運搬するための物流インフラとして活躍した人工河川である堀川、農業地帯への用水路である山田川など、様々な機能の河川空間に恵まれている。このような多彩な川の歴史を辿りつつ、河川景観を楽しむルートである。ＪＲ中間駅をスタートして、堀川と曲川が交差していた伏越跡に至る。その後、遠賀川の右岸の河川敷を歩き、遠賀川鉄橋や遠賀橋を眺める視点場を訪れる。一旦、土手にあがり、市役所の裏から堀川沿いを進み、中間唐戸へ、その後、曲川の土手にある緑道を通り、ＪＲ香月線跡に整備された遊歩道を通り、西鉄香月営業所へとゴールする。



写真15 遠賀川河川敷の自転車道



写真16 J R香月線跡の遊歩道

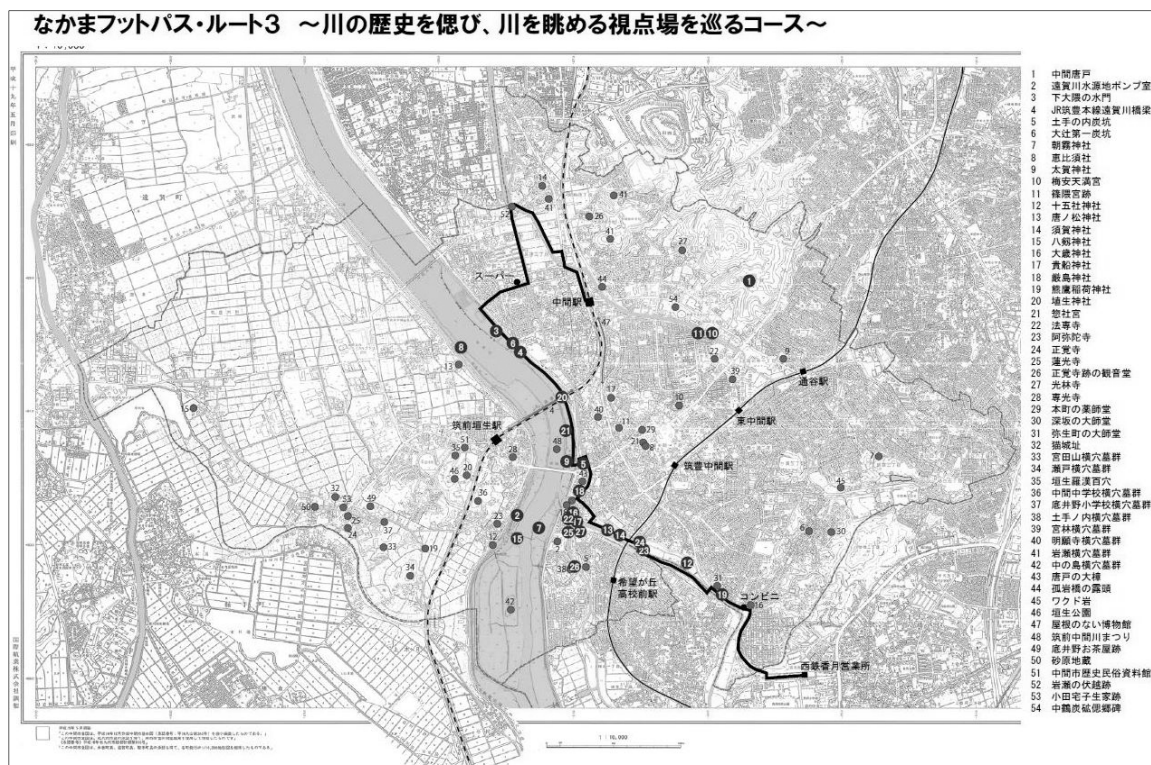


図8 なかまフットパス・ルート3～川の歴史を偲び、川を眺める視点場を巡るルート～

(2) 福岡県みやこ町における検討

みやこ町は福岡県の北東部、行橋市の西隣に隣接する人口約2万2千人の町である。平成18年3月に京都郡の勝山町、犀川町、豊津町の3町が合併してできた。東は行橋市と築上郡築上町、西は田川郡添田町、赤村、香春町、南は大分県中津市、北は北九州市に接しており、総面積は約151km²は福岡県内の町村では最大である。

みやこ町を構成する旧3町には固有の歴史・文化があり、異なる河川流域に位置し、また産業構造にもそれぞれ特徴がある。それが故に合併後も住民の間で旧町意識が根強く残っていた。町としては旧町のアイデンティティにとらわれない、「みやこ町」としての将来像を提起していきたいという観点から、次世代に向けたまちづくりを模索していた。このような背景に基づき、北九州市立大学都市政策研究所では平成23年度から地域住民を交えた主体的なまちづくり活動に町と協働で取り組んできた。これまでにまちづくりセミナーや勉強会、みやこ町の地域資源探しをテーマとしたワークショップ、町の観光サインを計画するワークショップ、観光・産業振興・定住促進の3つの観点から町の将来像を考えるワークショップなどを開催し、多くの町民の方々と意見交換を行ってきた。

この中の一つのアイディアとして発案されたのが「フットパス」を取り入れた町の周遊ルートであった。町域の広いみやこ町はカルスト台地、田園の広がる平野部、丘陵地帯、山岳部の森林地帯など様々なタイプの自然地形を有しており、またそこで生産される様々な農作物、果樹、花卉類は季節毎に様々な風景を演出してくれる。豊前国分寺や古墳など歴史的・文化的資源も多く残されている。さらにはお米、野菜、イノシシ肉などみやこ町ブランドとして通用する様々な特産品にも恵まれている。このような都市部にはない自然が与えてくれる魅力を紡ぐことで、町を訪れる人に対して年間を通じてハイキングやウォーキングに適した様々なコースを提供できるのではないかというのが、フットパスの提案に至った背景である。このワークショップを引き継ぐ形で、北九州市立大学地域創生学群・廣川ゼミと協働し、地図上での検討及び現地でのフィールドワークを通じて以下に示す4つのルート案を作成した。

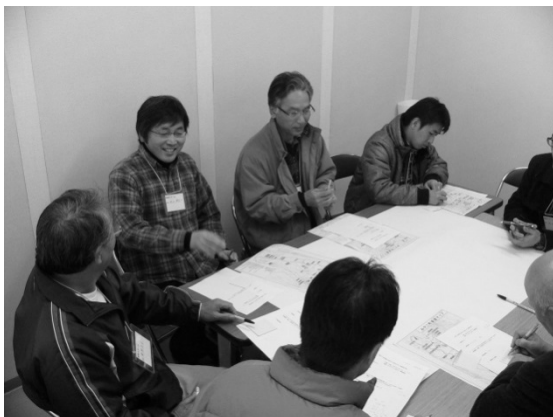


写真17 ワークショップによる検討

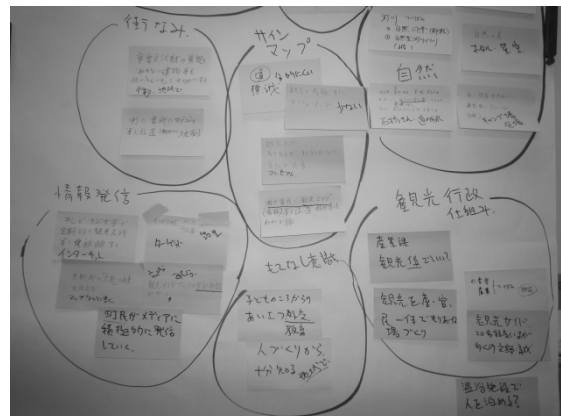


写真18 ワークショップの成果の一例

1) みやこ町フットパス・ルート1「犀川の平野部と本庄池を巡るコース」

旧犀川町の今川沿いに広がる平野部を巡るルート。町内を走る唯一の鉄道路線である平成筑豊鉄道田川線の犀川駅を起終点とする。犀川駅を出て北上するとすぐに田園地帯が広がり、東西両側に連なる山々をバックに平野が広がる雄大な風景を望むことができる。多くの農地で米と麦の二期作が行われており、四季によって異なる色合いの景色が楽しめる。今川から分岐する喜多良川沿いに南下すると京築地域で最も大きいため池である本庄池に至る。ルートの途中には「四季犀館」が立地しており、地域の特産品を購入したりトイレ休憩のために立ち寄ることが可能である。犀川駅には駐車場がないため、自家用車利用者はここが起終点となる。



写真19 田園風景が広がる景観



写真20 本庄池

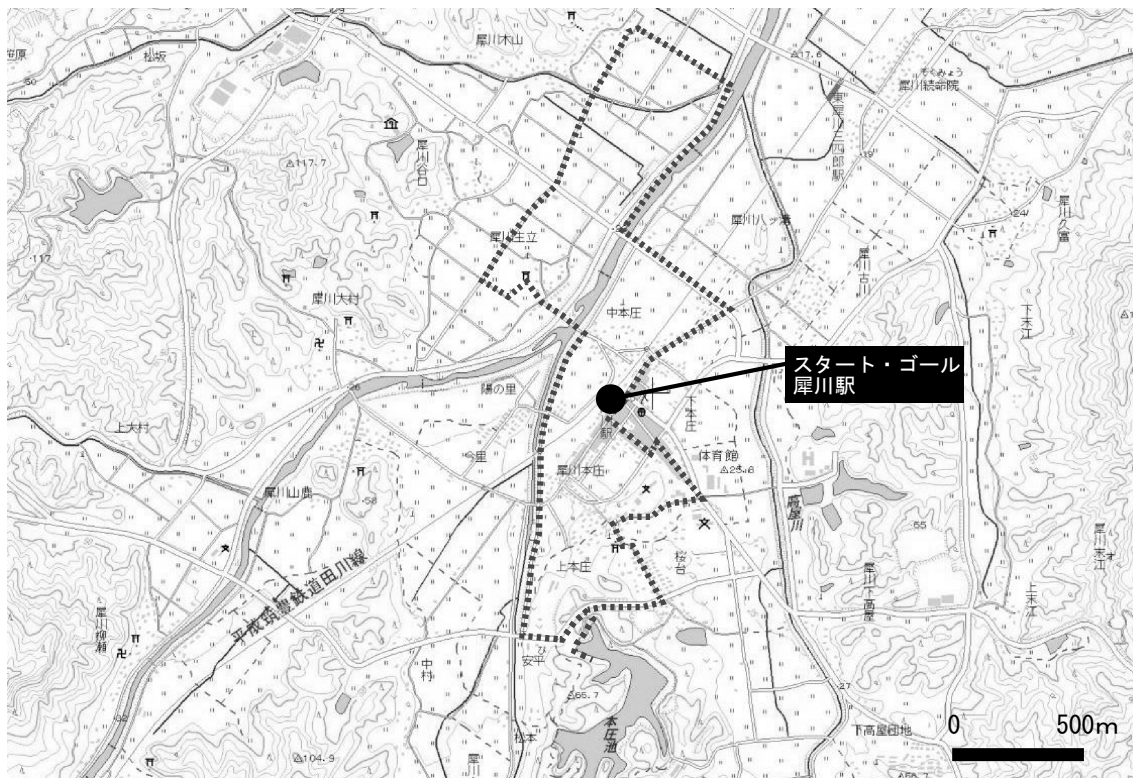


図9 みやこフットパスルート1～犀川の平野部と本庄池を巡るコース～

旧犀川町中心部よりさらに今川上流にある崎山地区を巡るルート。平成筑豊鉄道田川線の崎山駅を起終点とする。崎山駅を出て線路沿いに南下すると八幡神社のある小山にたどり着く。社殿へは階段で登ることができる。神社そばの今川に架かる橋から上流の方にあぜ道を進むと、京築地域に唯一現存する「林龍平酒造」の煙突と三角屋根の酒蔵が今川と周辺の緑に浮かび上がるような風景を見ることができる。酒蔵が空いている時間帯には銘酒「九州菊」を購入することも可能である。今川沿いを北上して戻ると人がすれ違いできないほどの狭い幅しかない歩行者専用橋がある。地域の利便性のために住民自らが造り、日常的な維持管理をやっているこのような通路を垣間見ることができるのも、フットパスの魅力である。



写真21 川越しに見える造り酒屋の煙突



写真22 地域住民のための木造橋



図10 みやこフットパスルート2～銘酒・九州菊の林龍平酒造と今川沿いを巡るコース～

3) みやこ町フットパス・ルート3「季節の果物畑と棚田の風景を巡るコース」

旧犀川町柳瀬から分岐して赤村方面へと至る県道の途中にある「松木果樹園」を起終点とするルート。松木果樹園は町内最大の観光果樹園で、なし、もも、ぶどう、いちごなど様々な果物を栽培している。園の駐車場を出て果樹園の中を下っていくと、季節毎に様々な実や花を見ることができる。川筋にある舗装された道をさらに進むと、小さな谷筋が広がる。ここには小規模ながら棚田があり、特に田植えが終わった頃からは水面と緑の美しいコントラストを楽しむ事ができる。棚田の中のあぜ道を進み、帰路は樹木に覆われた林道を通して再び松木果樹園へと戻る。果樹園のレストランでは昼食を取ることも可能で、また園内の販売コーナーでは採りたての果物や自家製ジャムを購入することができる。



写真23 果樹園内の果物畑



写真24 棚田の風景

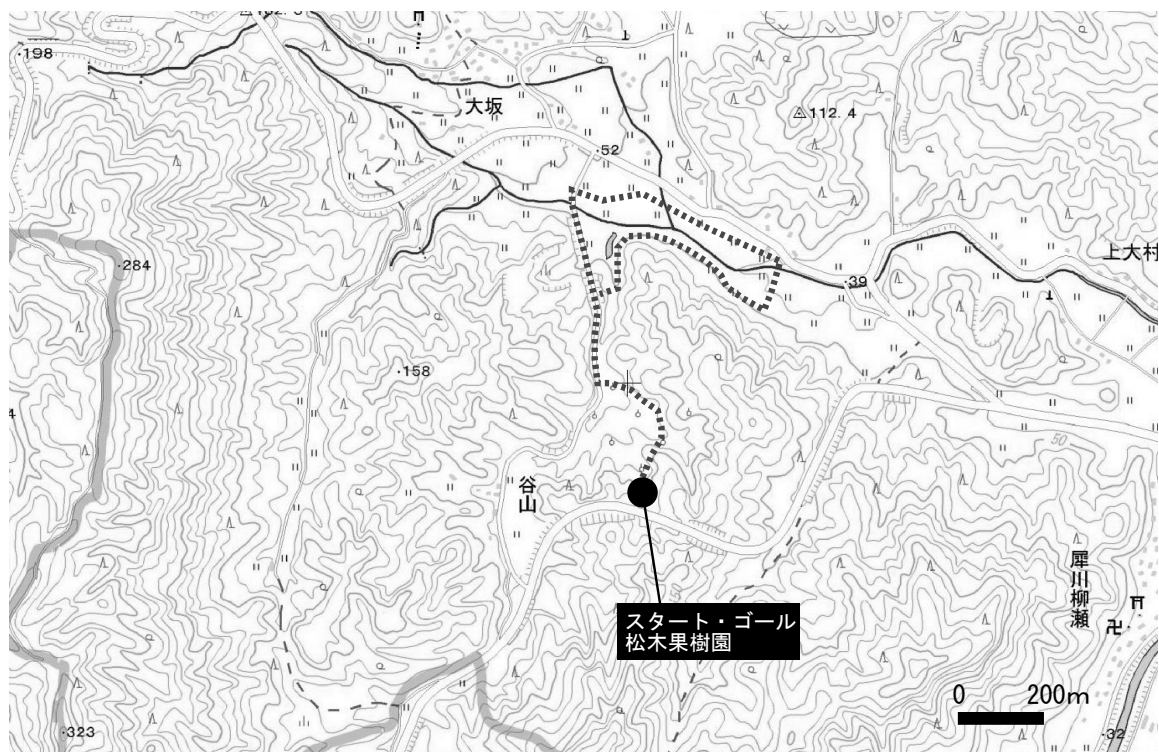


図11 みやこフットパスルート3～犀川の平野部と本庄池を巡るコース～

4) みやこ町フットパス・ルート4「黒田官兵衛ゆかりの地・馬ヶ岳から町を眺めるコース」

平成筑豊鉄道田川線の豊津駅を起点、新豊津駅を終点とするルート。行橋市との境にそびえる標高216mの馬ヶ岳には中世の頃から山城が築かれていた。黒田孝高（官兵衛）は豊臣秀吉からこの一帯を与えられ、馬ヶ岳城を居城とし、九州平定のため出陣した秀吉も天正15年（1587年）にここに滞在した記録が残っている。2014年にはNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」が放映され、官兵衛ゆかりの地を巡る観光客の増加が見込めることから、町では登山道の安全確保や山頂における眺望確保のための様々な環境整備を行ってきた。ルートは豊津駅を出て、行橋市内の大池そばのあぜ道を通り、大谷登山口から登山道を経て山頂へと至る。下りは町内の貴船神社へと至る登山道で、その後、花隈地区の田園風景を眺めながら新豊津駅と戻る。



写真25 大池



写真26 馬ヶ岳山頂から見る勝山方面の風景

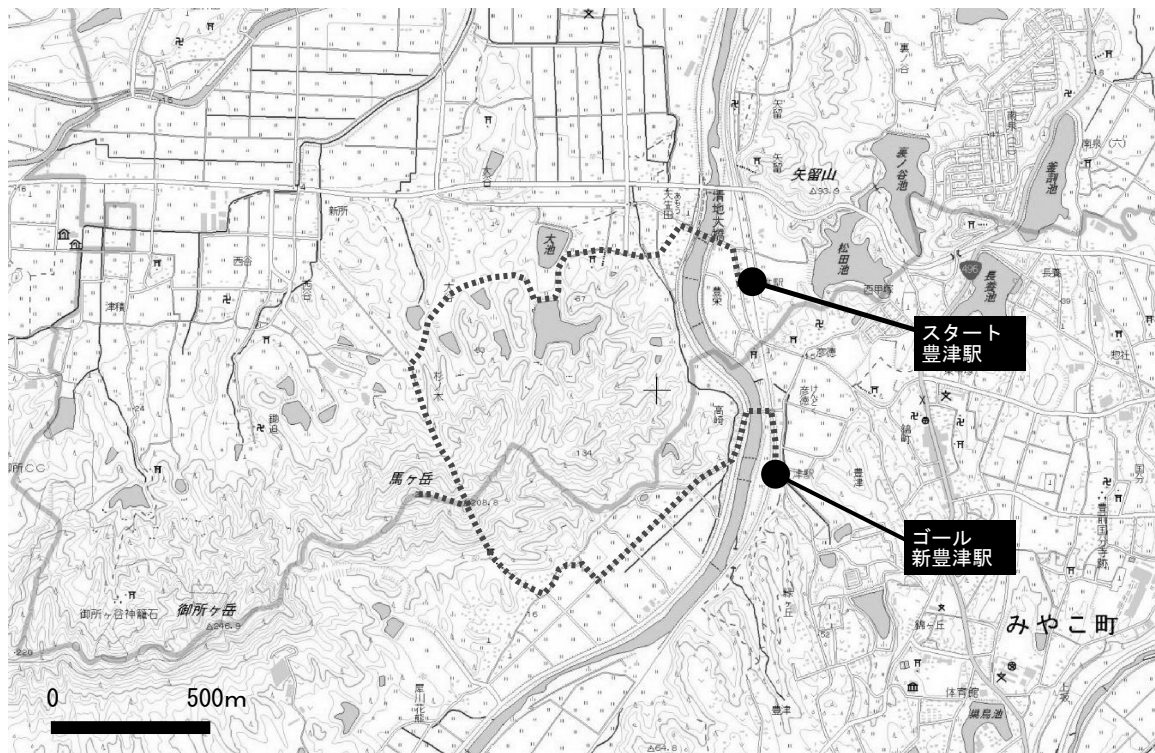


図12 みやこフットパスルート4～黒田官兵衛ゆかりの地・馬ヶ岳から町を眺めるコース～

4. フットパスによる地域活性化に向けた課題

(1) 組織体制の確立と情報発信

フットパスはルートを決め、地図を作成し、現地に案内表示を設置すればそれで終わりではない。自然条件は常に変化し、訪れる季節によって楽しみ方もそれぞれである。それ故、フットパスコースを日常的に歩いてその時々状況を把握し、またコース上に不具合があれば補修できるような維持管理体制が必要である。その上で、フットパスを目的として訪れる人々に対して絶え間のない情報発信を行うことも求められる。表1は日本国内のフットパス先進地において、フットパス活動を支えている組織の概要を整理したものである。ボランティア、NPO法人、法人格を持たない任意の協会といったようにそれぞれの推進組織体制は異なっているが、いずれの地域も地元自治体との連携を通じて、イベント開催、コース整備、地図作成などフットパス普及のための様々な活動を行っている。美里フットパス協会は公式ウェブサイトに加えてFacebookページを立ち上げており、日々歩いているフットパスコースの状況、その時々で体験できる植物や食べ物などの旬な情報、他地域との交流イベントなど、協会メンバーが日常的に情報発信を行っている。

表1 フットパス先進地における組織体制

自治体名	北海道黒松内町	東京都町田市	熊本県美里町
推進組織	黒松内町フットパスボランティア	NPO法人みどりのゆび	美里フットパス協会
公的機関との関係	事務局提供（町役場企画調整課内）	コース紹介（町田市観光コンベンション協会公式ウェブサイト内）	フットパスグッズ販売（美里町商工会公式ウェブサイト）
コース地図	無料配布	有料販売	有料販売
フットパスに関する主な活動内容	・コースの維持管理 ・道標や案内看板の整備 ・休憩用ベンチ設置 ・コースマップ作成 ・イベント開催	・ウォーキングイベント ・ガイドブック製作販売	・ガイド養成講座 ・イベント開催 ・コース整備 ・ガイド派遣 ・商品の制作販売
情報発信	公式ウェブサイト	公式ウェブサイト	公式ウェブサイト Facebook

中間市もみやこ町も現時点では行政主導によってフットパス推進のための第一歩を踏み出したに過ぎない状況である。今後フットパスを導入し、多くの交流人口を産みだしていくには、行政だけの力で推進していくことは不可能であり、リアルタイムでコースの状況が把握でき、日常的に情報発信のできる民間レベルの推進体制が欠かせない。

中間市では平成24年度に「観光・歴史ボランティア養成講座」を実施し、合計9名の市民の方々が参加した。今後はこの受講生などが中心となって、観光ボランティアガイドとして活躍していくことになるが、彼らはただ単に中間市の案内人としての役割にとどまらず、フットパス施策の推進役として活躍するだけの素地を有していると言える。受講生が中心とな

って、地元住民の視点から新たにルートの検討や提案を行い、地図の作成などへと発展し、将来的にはフットパス推進のための任意の組織結成へとつながり、市当局と連携したフットパス推進が期待できる。

一方、みやこ町でも平成23年度に実施したまちづくりワークショップにおいて、フットパスの提案が作業グループの一つから出された。このようなフットパス推進の芽を大事にして、地域住民有志による活動を初期段階からバックアップしていく体制が行政には求められる。町では観光協会設立に向けた動きも進んでいることから、観光施策とフットパス推進を有機的に結びつけ、取り組んでいくことが課題である。

(2) ルートに関する一定のルールづくりの必要性

フットパスはありのままの自然が残された道を歩き、その地域の自然を五感で感じながらゆっくりとした時間を過ごすことに意義がある。そのため、すべての人や自動車が通行可能であると判断できる舗装された道路ではなく、田畑の中のあぜ道や森の中の林道を歩くコース設定が必須である。ところがこのような道路は公道ではなく、私有地であることが多いため、フットパス利用者と地権者との間でトラブルの発生する可能性も指摘される。みやこ町でルートを検討するために現地調査を行った際も、その道が公道なのか私道なのかの判別できないケースが多々あった。外からの訪問客が田畑の中のあぜ道を通りたいときにそこに関係者と思われる人が農作業をしていれば、一言断ってから道を歩くこともできるが、常にそのような環境にあるわけではない。眺望に優れた場所であってもそこが私有地であれば立ち入ることはできず、フットパスのルートとしての価値が低下することにもつながる。

日本の先進地では行政やフットパス推進組織による長年の活動によって理解を深め、私有地を通行可能としている事例もある。北海道黒松内町ではコース上に私有地であることを示す案内板を設置している。ドイツでは公的機関の発行するパンフレットや市販の地図に示されたウォーキングコースは私有地であっても基本的には通行可能であるという認識を利用者は持っている。

フットパスが浸透し、外部からの訪問者が増えたとしても、一度に何百人という単位で来訪があるわけでもなく、基本的には1日数人、十数人というレベルであり、私有地への立入が地権者に著しい損失を与えとは考えにくい。したがって、地権者に対して、行政やフットパス推進組織が中心となって、フットパスの趣旨や意義について丁寧に周知することが初期段階で求められる課題であり、その理解を深めていくことが、良質なフットパスの提案につながっていくと言える。ただし一方的に私有地への立ち入りを認めてほしいという主張では地権者の理解を得にくい。例えば農地を通るルートであれば、田植え時期など立ち入りを望まない期間もあると考えられる。フットパス推進側と地権者との間で、立ち入り可能な季節、時間帯、利用者が立ち入り可能だと判断できるサイン計画などに関して一定のルールを定め、双方が協働してそのルールを運営していく体制の確立が課題と言える。

(3) フットパス推進を地域課題の解決に結びつける視点

フットパスの推進は地域活性化の一つのツールとして位置づけられるが、単に来訪者増による交流人口拡大にとどまらない視点が重要である。フットパス利用者の満足度を高めることは、フットパス施策における最も重要、かつ最も優先的に実現すべき目標と言えるが、同時に地域課題を踏まえた取り組みを行うことによって、その解決を実現するための有効な手段になり得る可能性を秘めている。

中間市は市内にある遠賀川水源地ポンプ室が「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の構成資産としてユネスコ世界文化遺産への推薦が決定し、早ければ平成27年度にも登録される。世界遺産のネームバリューは高く、いったん登録が決定すると同ポンプ室を見学するために多くの観光客が訪れることが予測される。ただし、構成資産は福岡県内だけでも北九州市、大牟田市に存在し、近隣の山口県、佐賀県、熊本県にも多いことから、ポンプ室だけを見学し、次の資産へと移動するだけの観光ルートが組まれる可能性が高い。中間市には製鉄や石炭産業といった近代化産業に関連する施設に限っても中間唐戸、堀川運河、遠賀川鉄橋などの遺産があり、その他にも歴史的、文化的に価値の高い地域資源も多い。世界遺産を訪れる観光客がポンプ室のみを見学して帰る通過型観光ではなく、市内の他の資源にも立ち寄る周遊型観光を提供することが中間市の大きな課題である。フットパスの推進を周遊型観光の実現に向けた有効な施策の一つとして位置づけ、世界遺産観光客に対してどのような周遊観光のスタイルを提供できるかという視点で検討していくことが求められる。

みやこ町は人口減少、少子高齢化が進展し、特に広い町内に点在する小集落の過疎化が著しいことが課題である。逆にこのような集落は昔からの手つかずの自然が残されており、フットパスを楽しむに相応しい環境に恵まれている地域でもある。フットパスの魅力は自然を楽しみながら歩くことにとどまらず、その地域で採れる新鮮な野菜や地域に伝わる伝統的な料理を味わい、その地域に暮らす人々と交流することでもある。集落に多く住む高齢者にとって、外部の来訪者との交流によって対話が生まれ、特産品の周知に少しでもつながれば大きな意義がある。みやこ町の集落は立地する川筋ごとによって固有の歴史、文化的背景を有し、特産品一つとってもそれぞれ特徴がある。つまり、多様なフットパスの楽しみ方を提供できる素材が町内全域に広がっているのである。集落活性化とフットパス推進を有機的に連携することで、双方にとって効果的な成果が得られるような施策を検討していくことが課題である。

5. まとめ

本研究では、公的機関発行のパンフレット、市販の地図、携帯電話のアプリケーションなどによって豊富な情報発信が行なわれ、現地での案内が充実しているドイツの事例を紹介した。このような利用者のニーズに的確に対応した情報提供が多くの利用者を生みだし、自然地域の活性化につながっていることを指摘した。さらに福岡県中間市、みやこ町における具体的なフットパス施策を検討し、その円滑な運営、地域活性化につなげるために必要な課題

を指摘した。フットパスは自然のありのままの道を活用するものであり、どの町にもその素材は存在することから、いかにその都市の特異性、特殊性をアピールしていくかが求められる。人々の志向は時代と共にめまぐるしく移り変わることから、どのようなフットパスを提供できるのか、常に新しい情報を発信していくことも求められる。通行する小径そのものの魅力だけでは繰り返し訪問するリピーターの獲得にはつながらない。フットパスだけでない魅力をいかに付加できるのか、地域住民との触れ合い、道の駅では手に入れることのできない特産品など、より地域との交流が深まる施策との組み合わせによってフットパス施策が推進されることが望ましい。地域にとっても単に通過されるだけではなく“儲かるフットパス”になることで、私有地を通過する対価として考えることもできよう。持続可能なフットパス施策の展開に向けた検討を重ねていくことが今後の課題である。

参考文献

- 1) 日本フットパス協会ウェブサイト (<http://www.japan-footpath.jp/aboutfootpath.html>)
- 2) 「フットパス・シンポジウム2013in町田」でのシーラ・タルボット女史（英国ウォーカーズ・アー・ウェルカムタウン協会理事）による特別講演（2013年5月25日・町田市生涯学習センター）から
- 3) ドイツエコライフウェブサイト (<http://econavi.eic.or.jp/ecorepo/live/144>)
- 4) 中間市文化財の現状調査及び活用・観光方策に関する調査研究報告書，北九州市立大学都市政策研究所，平成24年3月
- 5) 中間市の川にまつわる地域資源を活かした活性化方策に関する調査研究報告書，北九州市立大学都市政策研究所，平成25年3月

補注

- (1) 閉店法は1900年にドイツ帝国で施行されたのが始まりで、当時小売店の営業は平日の5時から21時までに限られていた。その後旧西ドイツで1957年に施行され、東西統一後も引き継がれている。薬局、ガソリンスタンド、空港、観光地等の一部の小売店舗を除いて原則的に日曜日の営業は認められていない。導入の背景としては、日曜日がキリスト教の安息日であるという宗教的側面、労働者の長時間労働を防ぐ側面、小規模小売店舗を保護する側面などがあげられる。なお、2006年のサッカーW杯ドイツ大会を契機として徐々に規制緩和が進み、現在では州政府単位で条例によって定めている。ベルリン州やノルトライン＝ヴェストファーレン州などでは月曜から土曜日の24時間営業が認められ、また日曜日も年4回程度の営業が認められている州もある。